

プロジェクト名：日本の映像作品（映画およびテレビドラマ）に見る都市化・高齢化の描写とその影響に関する研究

プロジェクト代表者：氏名 水野 博介

1 研究の目的

日本は、この半世紀間に、都市化と高齢化が進行した。これらのことに関しては、さまざまな統計的なデータにも明らかである。しかしながら、数値あるいはグラフのようなデータとそれにもとづく記述は、人びとに断片的な知識をもたらすだけのものである。

それに対して、映画やテレビドラマといった映像作品は、フィクションではあるが、単なる虚構のイメージではなく、作品が制作された時代の社会のあり方を“反映”しており、作品を見た人びとに“共感”や“反省”をもたらし、場合によっては、何らかの“理想化されたモデル”を提供するものと考えられる。そのような作品は、特に、それが長期間にわたって上映・放映が続けられたものである場合、観客・視聴者の支持が相当に高かったわけであるから、人びとに対する影響力も強いものがあつたと推定される。

本研究では、それぞれ20年以上にわたって日本で上映・放映がなされ続けた稀な作品であるところの、松竹映画『男はつらいよ』（1969～1995年製作全48作、監督は大部分、山田洋次）およびTBSのテレビドラマ『渡る世間は鬼ばかり [略称：渡鬼（わたおに）]』（1990～2011年製作全10シリーズ、脚本はすべて橋田寿賀子）と、付加的に同じくTBSのテレビドラマ『寺内貫太郎一家』（1974～1975年製作第1・第2シリーズ、脚本はすべて向田邦子）を取り上げ、それらの作品のなかでなされた「都市化」と「高齢化」の様相に関する具体的な描写のあり方を分析するとともに、それらの描写の意味や影響について考察しようとしたものである。『寺内貫太郎一家』は、それほど長期にわたって放映されたわけではないが、70年代の貴重な作品であり、『渡鬼』と併せて、より長期的な様相を捉えるために分析に加えた。

2 研究の進め方

1で示した3つの作品の市販DVDを購入し、プロジェクト代表者と研究協力者とが分担して、それらのDVDを視聴しながら、あらかじめ作成しておいた「コーディング・シート」に、「都市化」および「高齢化」に関連した諸項目の有無とその内容について記入していった。それらは、

- ① 1作品毎に集計あるいは記述しなければならない「内容分析」の項目と、
- ② 複数の作品に共通する「構造分析」の項目

に大別され、

- ① については、作品のシリーズ単位で単純集計を行い、
- ② については、集計は行わない。

なお、「高齢化」については、同時に、社会学における「構築主義」的な観点から「家族」単位で、いわゆる「高齢者」の定義に当てはまる登場人物についての「役割」を特定していく、という方法をとった。

3 研究の成果

① 「東京」における「都市化」と「家族」の様相

「東京」は、1)都心、2)下町、3)山の手、および 4)郊外に大別できようが、これらのうち、高度経済成長期の 1960 年代以降の「都市化」によって大きな変化を遂げたのは、特に 1)と 4)であると言えよう。

ここで取り上げた映画およびテレビドラマ作品においては、「都市化」の影響を表面的にはあまり受けていない「東京」の 2)下町での、自営業の「家族」が主に描かれている。そこでは、短期的にはライフスタイル面での変化はあまり感じられないものの、年代的に見ていくと、そもそも「家族」というものの捉え方が大きく転換していることがわかる。すなわち、1970 年代であれば、自営業の人びとが考える「家族」は、血縁者だけでなく、従業員をも含めた「擬似大家族」的なものであったのに、時代が下るにつれて「家族」は血縁者だけに絞られる傾向がある。さらに、血縁者だけによる「家族」の場合、きょうだい達がそれぞれ結婚した後でも、実家に居るところの、言わば家父長的な存在（父あるいは母）を中心に複数の世帯が交流する「真正大家族」的な生き方と、きょうだいであっても、もはやそれほど交流することはない「独立家族」とが考えられるが、時代が下るにつれて、後者の生き方が増えていると思われる。

② 「東京」における「高齢化」の様相

ここで取り上げた映画およびテレビドラマ作品においては、基本的に、「東京」に長年暮らす人々が「高齢化」する様相も描かれている。そこでまず目につくのは、「家族」のなかで高齢化し、衰えが見える相手を互いにいたわる「相互扶助」的な心情のあり方である。これは、行動よりもむしろ言葉のうえで示されることが多い。しかしながら、それだからと言って、高齢者が「家族」のなかで、いわゆる「高齢者」として扱われることは少ない。高齢者であっても、「家族」のなかでは、第一義的には「父親」や「母親」あるいは「祖父」や「祖母」という立場として捉えられ、したがって、その「高齢者」が介護が必要になるような状況以外では、そのような立場に関連した「役割」を担う人物として見られるからである。

この「役割」としては、これらの「高齢者」を含む「家族」（と認識されている範囲）において、1)主たる「生計維持者」である場合や、2)主たる生計維持者でないにしても、例えば「孫」に対する「経済的支援者」である場合、3)経済的な面での支援はないにしても、「家事」や「子育て」における重要な「支援者」である場合、さらには 4)具体的な行動面での支援はしないにしても、重要な「助言者」であったり、「精神的な支え」となっている場合がある。これらの「役割」が、時代の変化とともに変動するという証拠は得られなかった。ただ、最近(2000 年代)になって、以上の役割のいずれも果たそうとしない、「没交渉」型と言うべきか、「家族」とは離れて独立した行動を取ろうとする「高齢者」が出現していることが、特筆すべきことであろう。

③ 「地方」における「都市化」と「高齢化」の様相

地方においては「都市化」の進展が見られない場所が多いと言うべきか、映画には伝統的な家並みや歴史的建造物が多く描かれている。映画において、その最後の姿を残す建造物もある。

逆に、「高齢化」は映画に描かれる風景の隅々にその片鱗を見せている。